

機関番号：13601

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2010

課題番号：19530587

研究課題名（和文） 教師と保護者の連携を促進する保護者面談の展開モデルの開発

研究課題名（英文） Development of an Expanded Model for Guardian Interviews that Promote Cooperation between Teachers and Guardians

研究代表者

上村 恵津子（KAMIMURA ETSUKO）

信州大学・教育学部・教授

研究者番号：30334874

研究成果の概要（和文）：

本研究では、保護者面談で教師が保護者との連携を促進するプロセスを検討した。教師および保護者の発話とその相互作用を分析した結果、教師の発話には、面談目的が曖昧である反面、自らの対応を振り返り具体的な対応策を積極的に提案する特徴があることが明らかになった。また、振り返りや葛藤のような教師の思考過程の言語化は、援助策具体化に向けた試行錯誤を保護者と共有することにつながり、連携を促進すると考えられた。

研究成果の概要（英文）：

This study examined the process by which teachers promote cooperation with guardians in guardian interviews. The results of the analysis of the statements of the teachers and guardians and the mutual interactions between the statements revealed that the statements of the teachers had the characteristics that the objective for the interview was ambiguous while on the other hand they reflected on their own responses and proactively proposed specific solutions. Furthermore, the results appeared to show that verbalization of the thought processes of the teachers such as reflection and disagreement leads them to share with the guardians the process of trial-and-error leading to the realization of assistance measures and therefore promoting cooperation.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：学校心理学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：教育系心理学、保護者面談、発話分析、連携

1. 研究開始当初の背景

(1) 学校教育における喫緊の課題

子どもの問題の多様化に伴い学校現場では保護者との連携によるチーム援助が注目されるようになってきた。しかし、教師と保護者は子どもの養育における役割や価値観が異なるため、教師が保護者と協力して援助に携わる関係を構築するのは容易ではない。いかに教師が保護者との良好な協力関係を構築、維持するかが大きな課題となっている。

(2) 保護者と教師の連携に関わる研究の動向

保護者と教師の連携については、代表的なモデルがあるわけではなく、コンサルテーションやカウンセリングの視点から保護者との連携におけるポイントが紹介されてきた。しかし、これらのモデルは一般的な対人援助を基盤としたものであり、教師の専門性を活かした連携のあり方を詳細に分析、検討するには至っていない。また、連携の具体的な場面を取り上げ教師の有効なコミュニケーションを検討した研究はない。保護者とのコンサルテーションの代表的な場面である保護者面談について、教師の特徴を活かした展開モデルを示すことは、保護者とのよりよい関係構築に向けた教師の対応について具体的な示唆を与えることになると思われる。

2. 研究の目的

(1) 保護者面談における教師および保護者の発話をグラウンデッド・セオリー・アプローチにより分析し、教師がどのように面談を展開し保護者との連携を構築しているのか、そのプロセスを明らかにする。

(2) 保護者と教師の発話の相互作用を分析し、教師の専門性を活かした保護者面談の展開モデルを開発する。

3. 研究の方法

(1) 保護者面談での教師および保護者の発話分析

- ① ロールプレイによる保護者面談での発話分析
- ② 実際の保護者面談での発話分析

(2) 保護者面談における保護者と教師の発話の相互作用の分析

- ① ロールプレイによる保護者面談での相互作用の分析
- ② 実際の保護者面談での相互作用の分析
- ③ 連携を促進、あるいは困難にする教師の発話特徴の分析

4. 研究成果

(1) 保護者面談での教師および保護者の発話分析結果

① 教師の発話分析結果

教師の発話分析の結果、教師は「援助具体化」と「保護者との関係構築」のプロセスにより保護者との連携を構築しているとの仮説が生成された。仮説と既存のコンサルテーションモデルとの比較から、教師が行う保護者面談の特徴は、教師が自分自身の対応を振り返り、対応策について積極的に提案する点にあると考えられた。

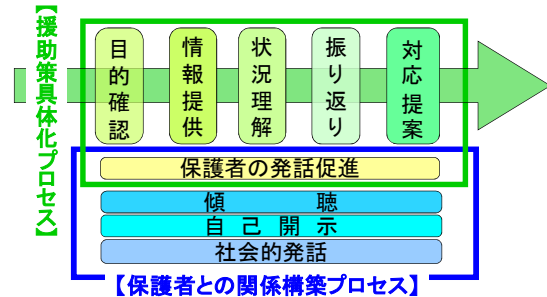


図1 教師の連携促進プロセスのモデル

② 保護者の発話分析結果

保護者の発話分析の結果、保護者の発話は「援助具体化」「発信伝達」「受信・相互作用促進」のプロセスに統合された。保護者においても、これまでの自分自身の対応を振り返る発話が見受けられたが、発話分析から、子どもや教師の視点の追加により保護者の現状分析がさらに進み振り返りが可能となると考えられた。さらに、保護者の発話には、客観的視点では整理しきれない自らの願望や価値観を表現し、子どもと関わる際に生じる多様な感情や問題解決に対する葛藤を語る自己開示的な発話も見受けられた。これらの葛藤表現は、保護者の主観的視点に新たな視点が追加されつつある過程を示すものとも考えられた。

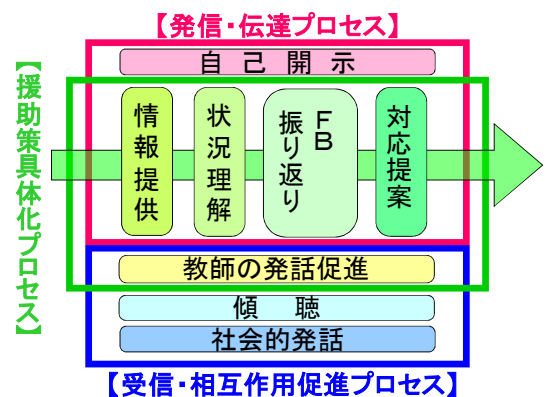


図2 保護者の連携促進プロセスのモデル

(2) 保護者面談における保護者と教師の発話の相互作用の分析

相互作用の分析にあたっては、本研究における連携の定義から「同調性」「コミュニケーションの方向性」の2点で分析することとした

。これら2点に加え、保護者の視点から「サポートに関する教師の発話状況」を分析の視点に加えた。

① ロールプレイの相互作用分析結果

ロールプレイ13件の面談の相互作用を分析した結果、コミュニケーションに偏りがあり、最後まで「非同調」が見られる面談の分析からは、教師が自らの価値観を頑なに主張したり、早急な振り返りや謝罪、対応策の提案を行ったりすることにより連携が困難になると考えられた。一方、面談途中で非同調がありながらも最後には同調に転じる面談を分析した結果、一方的に対応策を提案しながらも連携が促進されている面談においては、教師と保護者の意図にズレが生じた場面で教師がその葛藤を面談で取り上げていることが分かった。また、早急な振り返りや対応策の提案を行いながらも連携が促進されている面談では、情報を十分に共有してから対応策の検討に移行する展開となっていた。

② 実際の保護者面談の相互作用分析結果

実際の保護者面談における保護者と教師の相互作用の分析を行った結果、連携を促進する教師には、対応策を提案する前に情報交換を十分に行い、提案に至るまでの教師の思考過程を言語化しつつ具体的に対応策を提案するといった発話特徴が認められた。子どもの直接的な援助者であり、教育の専門性を有する教師の特徴をふまれば、具体的な情報提供、多様な意味づけ、自らが行う対応策の提案等の発話により教師の特徴を活かした面談の展開が可能になると考えられた。

(3) 援助策具体化プロセスにおいて連携を促進する教師の発話特徴

面談目的確認においては、具体的な事実を共有する以前に、どのような背景を抱えて保護者が面談に臨んでいるのか、保護者の視点を理解することが重要となっていた。つまり、保護者が抱える様々な事情や感情を理解することにより保護者が物事を理解する枠組み、すなわち「ものさし」(尾崎, 1997)を理解することが連携の焦点と考えられた。

情報提供においては、行動レベルでの具体的な情報提供により情報を共有することが連携の焦点となっていると考えられた。

状況理解や振り返りでは、対応策に至るまでの教師の思考過程を言語化し、子どもの実態や行動の意味づけ、振り返りにより生じる教師の葛藤やゆらぎを保護者と共有することが連携の焦点と考えられた。

対応策提案では、教師が、子どもの直接的な援助者、また、教育の専門家として、具体的な対応策を積極的に提案することが重要であった。この際、子どもへの声かけの仕方、周囲の子どもや教員への対応、双方の連携の

方法を具体的に示し、対応策の具体的なイメージを保護者と共有することが連携の焦点となっていると考えられた。

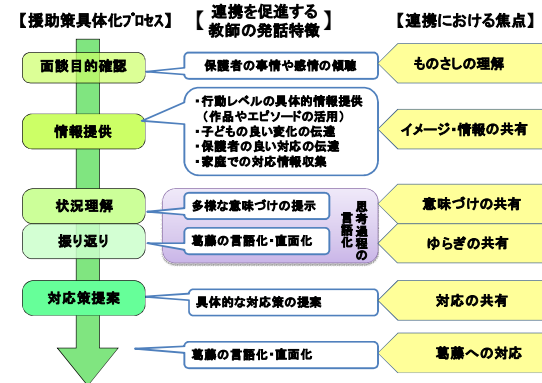


図3 相互作用の分析結果に基づく連携の焦点および教師の発話特徴

最後に、保護者と意見の食い違いが生じた場面では、教師が葛藤を言語化し、面談で扱う内容を検討し直すことが重要であった。このような葛藤の言語化には、保護者面談における両者のズレを調整するフィードバック機能があるとも考えられた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

① 上村恵津子・石隈利紀、教師が行う保護者面談に関する研究の動向と課題、信州大学教育学部研究論集、査読無、第3号、2010、127-140

<https://soar-ir.shinshu-u.ac.jp/dspace/handle/10091/10697>

② 上村恵津子・石隈利紀、保護者面談における保護者の連携構築プロセスに関する研究—保護者の発話分析を通して—、学校心理学研究、査読有、第8巻、2008、59-73

③ 上村恵津子・石隈利紀、保護者面談における教師の連携構築プロセスに関する研究—グラウンデッド・セオリー・アプローチによる教師の発話分析を通して—、教育心理学研究、査読有、第55巻、2007、560-572
<https://www.tulips.tsukuba.ac.jp/dspace/handle/2241/100295>

[学会発表] (計2件)

① 上村恵津子・石隈利紀、保護者面談における教師の連携促進プロセス—実際の面談の発話分析による仮説モデルの検討—、日本学校心理士会2010年度大会、2010年8月21日、東海大学湘南キャンパス

- ②上村惠津子・石隈利紀、保護者面談における保護者の連携構築プロセスに関する研究、日本学校心理士会 2007 年度大会、2007 年 8 月 11 日、千里ライフサイエンスセンター

6. 研究組織

(1)研究代表者

上村 惠津子(KAMIMURA ETSUKO)

信州大学・教育学部・教授

研究者番号：30334874

(2)研究分担者

石隈 利紀(ISHIKUMA TOSHINORI)

筑波大学・人間総合科学研究科・教授

研究者番号：50232278

永松 裕希(NAGAMATSU YUKI)

信州大学・教育学部・教授

研究者番号：60324216

水野 治久(MIZUNO HARUHISA)

大阪教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：80282937